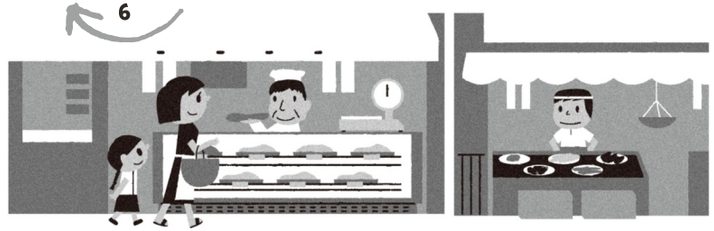
変わる日本の「暮らし」と「まち」 6

団地で買い物、ふたたび

埼玉・原市団地（1966年◆昭和41年）

新田匡央
にった・まさお

illustration：Shigeyuki Sakata



埼玉県上尾市。その南東部に位置する原市団地が完成したのは、46年前の1966年11月のことだ。

原市は古くから市が立つ集落だった。江戸時代初期には毎月3と8のつく日に市が開かれ、隣接地域からも商人や買い物客が集まるほどの賑わいを見せた。だが、1883年に上野と熊谷を結ぶ鉄道が開通、上尾駅が開業するとともに市の賑わいは失われる。月に6回立った市も、1930年代までにほぼ姿を消した。

約1600戸、最盛期の住民が6000人ほどの原市団地ができたのは、地域の中心が上尾に移ってからだ。直線距離で約4キロある上尾まで買い物に出るのは現実的ではない。住民の日々の暮らしを支えたのは、団地の敷地内と近所にある商店街だった。商店街には八百屋、肉屋、魚屋などの専門店が軒を連ねた。小さなスーパーもあり、生鮮食品から雑貨までほとんどのものは揃った。

◆買い物事情の激変

当時の主婦には、その日の食事に使う食材はその日に買う習慣があった。毎日商店街に通う主婦と商店主は顔なじみになり、日常会話を交わすようになる。商店街では近所の主婦とも毎日顔を合わせた。商店街が井戸端となり、主婦たちは世間話に花を咲かせた。買い物の場としての商店街は、コミュニティーのつながりが育まれる場としても機能していた。

その状態も長くは続かない。当初団地に入居したのは子育て世代が大半だった。子どもたちが成長するにつれ、食材の消費量は急激に増える。毎日の買い物の量も増え、買い物は重労働になった。団地の近郊に大型スーパーが進出したのは、そんなころだった。

おりしも、80年代に入り車社会が到来していた。団地にもマイカーを持つ家庭が増えた。買い物は週末に車で大型スーパーに出かけてまとめ買いをする形に変化を始めた。一ヵ所ですべてが揃い、雨に濡れることなく重い荷物を車で運ぶことができる。買い物のスタイルが劇的に変わるにつれ、商店街は打撃を受けた。

子どもたちが成人して団地から出て行くと、買い物の量そのものが激減する。商店街で買い物をする人はさらに減少し、シャッターを閉める店が出た。

近年、団地住民の高齢化率が3割に迫った。高齢者は大型スーパーでまとめ買いをする必要もなくなった。だが、かつてのような商店街は近所にない。近くに小さなスーパーはあるが、品揃えの豊富なスーパーは1キロほど離れた場所にしかない。団地の高齢者は、日常の買い物が困難な「買い物弱者」と呼ばれ始めた。

一般的に、買い物弱者対策には近所に店舗を作ることと、商品の宅配がある。だが、そのハードルは低くない。店舗を作るには採算性が問題となり、宅配には別途手数料がかかってしまう。

◆人がつながる拠点に

URは、原市団地が目指す将来像の一つを「高齢者にやさしい団地」とした。エレベーターの設置や間取り改善、介護サービス事業の誘致、生活支援アドバイザーの配置などがその具体的施策だ。

さらにURは、さいたまコープも誘致する。さいたまコープは昨年1月、買い物弱者の高齢者を支援する「原市団地ステーション（以下ステーション）」を開設した。

団地商店街の店舗を活用したステーションでは、さいたまコープの「コープデリ宅配商品」の受け渡しが行われる。希望者はコープの組合員となり、2000点に及ぶカタログの中から週に1回注文を出す。商品は翌週ステーションに配送され、購入者はステーションまで取りに行く。宅配をしないので手数料はかからない。

宅配商品をわざわざステーションまで取りに行く。この仕組みについて、ステーションの宇恵一之氏は次のように語る。

「確かに、団地の高齢者にとっての利便性を考えると、宅配がいいのかもしれません。でも、高齢者のなかには、目的がないと外に出られない人もいるのです。週に1度だけでもここに歩いて来ることで、肉体的にも精神的にも健康になるためのお役に立てばという思いもあるのです」

団地ステーションが出来て、高齢者も外出することが多くなった

実際には、具合が悪いから取りに行けないという要請があれば宅配にも対応する。しかし、オープンから1年半でそうしたケースはほとんどなかったという。高齢者はステーションに来ることを楽しみにしているようだ。

「雨の日も、雪の日も、台風の日も、カッパを着て取りに来られるんです。やはり嬉しいですね」

そう話す宇恵氏はステーションを訪れる人の顔、名前、買う物を把握している。注文したのに受け取りに来ない人には連絡し、連絡がつかなければ生活支援アドバイザーや自治会などに通報して安否を確認することまで踏み込む。

ステーションは商品の受け渡しだけでなく、週に一度即売会（野菜や果物や和菓子の店頭販売）が開かれている。せっかく外に出た高齢者の交流を深めるため、お茶飲み場としても開放される。集まった人々の茶飲み話から、自然発生的に手芸クラブが発足。殺風景で入りにくいという利用者の声に応えてお菓子を置いたことをきっかけにして、日持ちのする食品を陳列するようにもなった。

ステーションでは、介護相談会や健康相談、試食会などのイベントも開催する。宇恵氏は言う。

「皆さんから助言をいただき、ステーションを住民交流の拠点として一緒に作り上げていきたい」

利用者からは「おしゃべりする場ができてよかった」という声があがる。ステーションは単なる買い物弱者対策ではなく、かつての商店街のようにコミュニティーを醸成する場になるに違いない。

街に、ルネッサンス
UR都市機構

［企画制作］新潮社